

三

かゝる淋しき深山路も

人やすむらん朝げたく

けぶりの末のかつ見えて

何處なるらん杣木こる

音の木精に響くなり

四

尾山にかゝる白雲は

花にやあらん吹く風に

春水

ひすひゐし水もけさはとけそめて漣たてりさる澤の池

鶯

鶯の初音待ちえて梅のはな今一しはのいろまさりけり

残りゐし高根の雪は消えはてゝ鳴音のとけき谷の鶯

春雨

春雨の霞める軒にうちけふりくるともわかぬ夕へさひしも

池邊抑

池水にかけをうつせる青柳の糸にそ春の色は見えける

句ひ床しく音つれて

霞にむせぶ雁金の

聲は雲井に二つ三つ

五

八重の霞に鶯も

蹈みや迷へる溪の底

聲は幽に音づれて

歸りかゝれるこの身をば

えばし留むる如くなり

哲

人

春 雨

人知れず春しりそめし若草に音さへしのふ春の雨かな

霞

空寒き雪けの雲の立ち消えて遠こちかけてかすむ今日かな

鶯

梅枝の香をなつかしみ鶯の千代のかさしとなくと嬉しき

嬉しき物

世の中にうれしきものは旅の中に故郷よりの親の玉章

樂しき物

埋火をかされてしつゝ思ふとち昔をかたる夜半のたのしさ

悲えき物

行末をたのまんな子先立し親の心やかなしかるらむ

佗しき物

壁はやれ軒かたふきし賤かやにたつる烟も心ほそしや

哀なる物

村まつりよき衣きたるちこの中につゝりをわふる賤か孤子

鶯出谷

春立ては谷間をうとみ鶯もきつゝ鳴くなり庭の梅か枝

旭

麓

蘆

月

江

楠

生

鶯の初音のどかに聞ゆなり谷の古巢を今や出つらん

霞添春色

野も山もそれともわかす梓弓春を深めて立つ霞かな

雲雀幽

春霞立田の野邊の空高く幽に見えて鳴く雲雀かな

山家春雨

つれ／＼に木の茅春雨降りはへて訪ふ人もなき山蔭の庵

待花

谷河の波の初花うち出ぬ今幾日ありて櫻咲かなん

都春月

長閑を柳にしめて霞むかな都大路の春の夜の月  
人としむ都の春の中空に静けくすめる夜はの月かけ

治世文事興

波風もさはかぬ御代はあまの子も學ひの海に玉とあされる  
吹く風も枝を鳴らさぬ御代なれば文の林の日に繁り行く

塵袋を探りて二つ三つ

梓弓はるをそむけて行雁のゆくゑこひしき故郷の空  
音に出てゝなくなる虫の心をや哀としてしもいさよひの月

えるやいかに聲ふりたてゝ鈴虫のねになきいつる人もありけり  
白杵の海よする渚の波の音を君は心に何と聞くらん  
水無月の照る日の色に咲きいてんを年ふる里のなてしこの花

遠山霞

やまびと

うす墨の繪にも似たりや麓路をれはるになして霞む遠山  
棹姫の花のすかたやかくすらん春のみ山は霞たなひく

若菜

出て見よ里の乙女等打つれて雪の消間に若菜つむなり  
たらちねのためと思へは何かあらん雲かき分けて根芹つむとも

俳句

脊戸口の棄業に迷ふ胡蝶かな  
君言はず花こゝろなく散りかゝる  
酒醒めて夜寒奇なり春の雪  
春雨のふる夕暮や渡船  
奥ゆかし短冊たるゝ花の枝  
春風や勇士の墓表三千墓  
増荒雄の魂かはる梅の花  
さらでだに眠たきものを春の雨

秋  
琴

蘭  
溪  
白  
兔